

言葉の教育は幼児期にこそ必要である

言葉の教育においては、その最も重要な部分は生後五ヵ年間に完成してしまうことが、世界のいずれの国においても、実験や観察により明らかにされていて、異論は全くありません。

フランスのポール・ショシャルは、植民地の多くの原住民の子供たちを観察調査した結果、「五歳以前にフランスに移住した原住民の子供は、完全なフランス語をあやつる能力を身につけ、フランス人と全く同等の、文化を享受する能力を獲得するようになるが、六歳以後にフランスに移住した場合、それも、六歳より遅くなればなるほど、フランス語の習得がうまくいかなくなり、フランスの文化的な生活に適応しにくくなっている。」ということを実実に基づいて報告しています。

それよりちらっと明瞭な実例は、狼少女「カマラ」の示した事実でしょう。一九二〇年、インドのベンガル州で、シング牧師の手によって、狼の洞窟から救い出され、人間の社会に復帰した少女カマラの観察記録は、乳幼児期の教育の重要性を最もよく説いていると思います。

カマラが救出された時の年齢は七、八気だった、と推定されています。狼に育て始められたのは、生後半年くらいの時と推定され、したがって、それ以後の七年間を狼に育てられた、と推定されています。

救出後、シング牧師夫妻によって、愛情ある行き届いた養育を受けたのにもかかわらず、人語を初めて発声できるようになったのは、養育を受けて実に二か年という月日がたった後でした。

その後、四年間に三十語、さらにその後の二年間に四十五話が、やっと使えるようになった、と報告されています。

このような、言語における遅々たる発達には、乳幼児期に狼に育てられ、人語を聞くことが全くなかったためだ、と断定されており、決して彼女が精薄児ではなく、知能そのものは通常児であったことを、カマラの研究にたずさわった心理学者たちは断定しています。